授受表現に関する研究動向と今後の課題

——日本国内における文献調査より——

朱炫姝（筑波大学大学院生）

要　旨

本稿は、1960 年代から現在に至るまで授受表現研究の文献を整理し、明らかになったことについて検証し、今後一層の発展を図るための展望について考察したものでる。1980 年代までは本動詞用法に関する研究が主であったが、その後補助動詞用法として一部の表現と配慮表現との関係について注目されてきている。2000 年代以降の研究では比較・対照研究や第二言語習得の研究へ展開されている。今後の展望として授受表現の構文的な特徴と談話における発話機能との関連性についての研究が必要とされることを指摘した。

キーワード:授受表現、本動詞用法と補助動詞用法、構造分析、発話機能

1. はじめに

日本語には、様々な授受表現の形式があり「やる・あげる・さしあげる」「くれる・くださる」「もらう・いただく」の動詞がその代表的な表現である。これらの授受動詞の先行研究について、古くは、国語の研究として国文法を含む記述的な立場から、他言語との共通点・相違点を扱う比較・対照研究、母語としての習得研究、第二言語としての日本語教育研究があり、通時的観点からの研究、方言学など、様々である。このように、数多くの研究分野にわたって研究がなされてきているものの、未解決のまま残されている課題が山積しており、研究し続けられてきている。

本稿では、授受表現研究の土台となる先行研究の文献を調査し、今までなされてきたテーマを整理し、今後授受表現の研究の展望と課題について述べる。2 章では時代の流れに沿って研究推移を考察し、3 章ではテーマ別授受表現の研究についてまとめる。3.1 節では授受表現の成立と変化について通時的観点から捉えた研究について、3.2 節では授受表現の構造と意味・機能についての研究をまとめる。3.3 節では、英語・中国語・韓国語との比較対照分析の観点から捉えた研究について、3.4 節では、第二言語習得としての日本語教育の観点からの研究を扱う。4 章では先行研究の知見では解決できなかった問題を指摘し、5 章で授受表現研究の鳥瞰図を示し、まとめる。

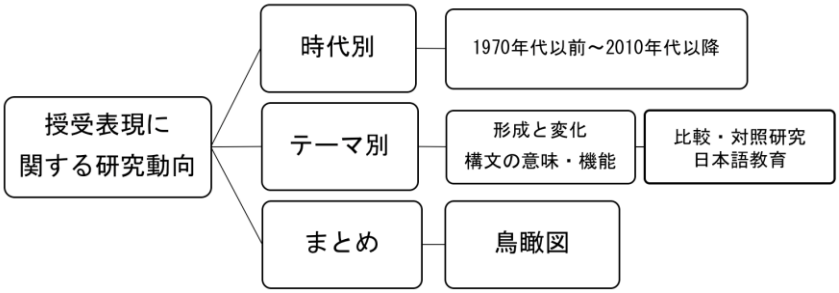

図 1 授受表現に関する研究動向

2.授受表現研究史

1970 年代以前、授受表現に関する研究は主に本動詞用法としての研究であるが、授受表現の持つ視点という観点から体系的に扱った初期の研究には、教科研東京国語部会・言語教育研究サークル（1963)、宮地（1965）がある。それに、大江（1975）は本動詞としての日本語授受表現と英語を比較し、奥津（1979）は、日本語と英語、それに朝鮮語を比較し、視点の制約について他言語との相違点を分析した。特に、奥津（1979）は、授受表現の体系化を示しており、その後の研究にも影響を与えていると思われるため、次章で改めて確認する。

1980 年代では、林八龍（イム・パルリョン 1980）による朝鮮語との対照分析を始め、多言語との比較・対照研究が続けられている。また、視点の観点において共感度の概念を提唱した久野（1987[1978]）や、奥津（1984・1986)、堀口（1987）の研究では、補助動詞用法としての授受表現にまで研究が進み、ヴォイスの観点から授受表現を捉えた。日本語教育の分野において、堀口（1983）は学習者の誤用に注目している。特に視点の置き方について、久野（1987[1978]）では視点の概念として「カメラ・アングルの違い、即ち、話し手が何処にカメラを置いて、この出来事を描写しているかの問題にある。(久野 ibid.:129）と捉えており、この概念は以降の研究でも従われている[(1)]。授受表現における視点は、話し手が、ある事柄においてどちら寄りのカメラ・アングルで見ているかで授受表現の類が選択される。ヴォイス表現として、授受表現は特有の視点の置き方を持つとされる。

1990 年代の研究には、山岡(1990)による依頼行為としての授受表現分析や金久保(1993)による待遇表現としての授受表現研究がなされている。米澤（1996）では史的変遷について述べられた。また、韓国語との対照研究は金昌男（キム・チャンナム 1999）がある。構文と意味の面から「～てくれる」文に注目した研究には、山橋（1999）がある。「～させていただく」や「～してあげます」などの表現形式に注目している研究は、井島（1999）があり、これらは新しい用法として配慮表現と捉えている点が特記できる。

2000 年代の研究の特徴としては、構文上の特徴として、澤田（2009）による主語の立て方や授受表現の格表示と体系についての考察と、益岡（2001）による恩恵性の概念が提唱された点、そして彭飛（ポン・フェイ 2005)、原田（2007）等によって授受表現を待遇表現の一つの形式として取り扱うことになった点が挙げられる。日高（2007）は授受表現の体系における地域別差異に注目している。また、授受表現の個々の表現に注目した研究が盛んに行われた。「～てあげる」については山橋（2003)、山本（2003）によって述べられており、「～てくれる」の機能については山本（2002)、原田（2006）で扱っている。砂川（2006）では「～てもらっていいですか」が指示や依頼のみならず許可求めの言語行為として使われるようになった現象について述べている。

金昌男(2002)は、日本語と韓国語の授受表現における分析を行い、門和(ムンケ 2006)、佐々木（2013）では中国語との比較分析を行った。第二言語習得に注目している研究には稲熊（2004)、尹喜貞（ユン・ヒジョン 2006）がある。前田（2001）は、「あげる」と「くれる」の成立について敬語の概念を用いて通時的に考察している。また、2003 年『月刊言語』の特別企画として、高見・加藤（2003abcd）では 4 回に渡り、授受表現における視点と意味についてまとめられている。

2010 年代以降、近年の研究動向として、2011 年『月刊言語』第 30 巻 11 号には、「やりもらいの日本語学」特集が組まれていることが挙げられる。その中では、授受表現の発達や、他言語とのタイポロジー、そして日本語教育から見た授受表現研究の方向性が示された。また、配慮表現の概念をポライトネス理論で検証する横倉（2011）、事態把握に焦点をおいた守屋（2011）の研究がある。さらに、「～ていただく」や「～させていただく」表現における自然度を検証する研究には伊藤（2011）、犬飼（2011）がある。そして、森（2014・2016）では、歴史的変遷における運用について語られている。

次章では、授受表現をめぐる研究において個々の研究分野別先行研究の知見を概観し、最後に授受表現研究における鳥瞰図として整理する。

3. テーマ別に見る授受表現研究の概観

3.1. 授受表現の形成と変化について

宮地（1981）では、補助動詞としての授受表現の成立について図 2 のように成立したと示している。常体の形式の後に、敬体が成立し、19 世紀後半までに 6 つの形式を定着されていることが分かった。

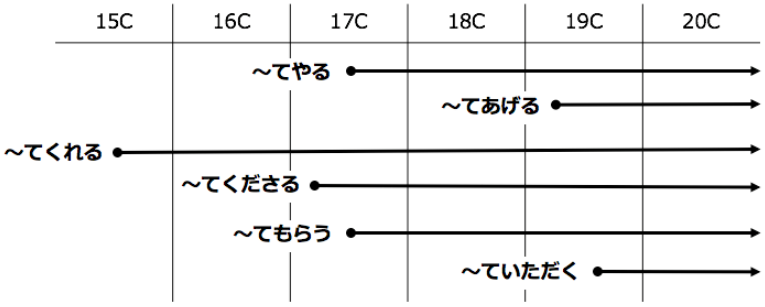

図 2 授受補助動詞の成立時期（宮地 1981:18）

一方、本動詞としての構文を概観すると、「やる」文は上代から人に物を渡す表現として使用された（前田 2001）。「あげる（あぐ）」は中世後期に一般化されたが、発生当時には物を上に上げるという意味で使われた。ここで「上」というのは、空間的な意味のみならず、身分において上位層に該当する人物に物を捧げるという意味としての使い方である。このような使い方は、成立当時から形成されており、「やる」は話し手から話し手の身分の低い人物に、「あげる」は身分の高い人物に対しての使用で使い分けされている。また、このような過程を経て「あげる（あぐ）」は、中世後期に一般化されたと述べている。そして、「～てさしあげる」文は近世以降登場し、定着された表現で、近世後期になって「～てやる」「～てあげる」「～てさしあげる」の 3 形式が全て使用され、敬意の面でその差が明らかになった（ibid.:36）[(2)]。次に、「～てくれる」文は、中世以降に入って、話し手自身のために相手が行動するように依頼する表現として使用される。そのため、動作主である相手への恩恵の気持ちを感じることになった。「～てくださる」文において記述はなされていない[(3)]。また、「～てもらう」文と「～ていただく」文は、近世以降一般化された表現として使用される（ibid.:40）。

森（2014）では、「～てください」の表現を受益表現命令形の用法としてみて、近世以前の用法と近世以降の用法で分けて分析している。その結果として、授受表現の命令形で、

近世までは「依頼」「勧め」の用法で用いることができたが、近世以降は地位の上位者に対して用いることができなくなるなど制限が生じたと述べられる。また、森（2016）では、授受表現に起きた変化について体系的な特徴の変化のみならず運用や語用論的制約が通時的な変化をもたらしている点を指摘している。その中で敬語カテゴリーとして常体と敬体の区別が生まれたのは、社会的変化にその要因があり、都市化の進行や家族単位の変化、上下関係の流動性の増加､社会の流動性の増加と敬語の変化を社会的変化と分析している。

3.2.授受表現の構造および意味・機能について

授受表現の構造および意味・機能についての研究は様々であるが、主に視点の制約という統語論レベルでの分析と、恩恵性という意味論レベルでの分析がある。まず、授受表現の視点については、宮地（1965）や久野（1987[1978]）、奥津（1984・1986）等により、本動詞用法の視点の制約がそのまま引き継がれ、話し手が基準となり、行為者との人間関係による授受表現が決まるとされる。その際、話し手と行為者の人間関係には、親疎関係のみならず、年や地位の上下による関係で普通体と敬体が分けられている。教科研東京国語部会・言語教育研究サークル（1963）では補助動詞用法としての授受表現について、3 つの形があり、それぞれの形体を整理しており、主語と対象語における転換について述べている。主語と視点の置き方によって次のような構文を持つことを基本構造とする（宮地 1965、大江 1975、久野 1987[1978]、山岡 1990、山田 2004）。

（1）　主語と視点の置き方による授受表現の構文

a.　[行為者]が[被行為者]に～**てやる･あげる･さしあげる**。

b.　[行為者]が[被行為者]に～**てくれる・くださる**。

c.　[被行為者]が[行為者]に～**てもらう・いただく**。

「～てあげる」系と「～てくれる」系の構文での相違点は、「行為者」と「被行為者」が同じ位置にあるが、話し手の立場をどちらに置くかによって、文が決まるのである。つまり､与え手が話し手本人もしくは受け手よりは話し手に近い人物の場合には｢～てあげる」系を、受け手が話し手本人もしくは近い人物の場合には「～てくれる」系を選択する。また、「行為者が被行為者に向けて～する」という事柄を述べる際、「～てくれる」系と「～てもらう」系で言い表すことができる。ここでは、被行為者のほうが話し手になるかもしくは話し手と近い人物であることが共通的なことである。しかし、行為者の視点から事柄を述べるか、受け手の視点から述べるかという選択によって表現が決まる。

（2）　田中さんが本を**くれた**。

（3）＊田中さんが私に本を買った。

（4）　田中さんが私に本を買っ**てくれた**。

（2）のように本動詞として授受動詞を使用した際、物の移動を表すが、物である「本」が話し手のほうに移動していることを田中さんの視点から描かれている。次に、彼が話し手である私に「買う」という動作を行った際、(3) のように言うと不自然さを感じる。ここでは (4) の「買ってくれた」のように、授受動詞を補助動詞用法として加えることで容認度が上がることが分かる。このような場面では、物である「本」は私のほうに向けていても、向けていなくても想定可能である。ここでは､「本を買う」行為が話し手に向けての

動作であることを表すことが、授受動詞の本動詞用法との相違点である。このように物の移動から行動の移動というふうに用法が拡大されたのを授受動詞の本動詞用法から補助動詞用法へと派生されたと説明する。

一方、意味論のレベルにおける授受表現の分析では、以下のような（5）を用いて、授受表現の「恩恵性[4]」について述べている。

（5）　太郎は僕にそのソフトの使い方を教え**てくれた**。（益岡 2001:31）

授受表現には、「利益・恩恵」などで表現される恩恵性を持つと述べているが、その解釈にはいくつかの条件が必要であると思われる。まず、話し手による当該行為（前項動詞）が好ましいと思う判断がなければならない。また、恩恵を感じるものが有情物であることが挙げられる。しかし、以下の例では全体的には恩恵の意を表してはいるが、授受表現では否定形を用いている。

（6）　この本を書くことは何度も諦めかけた。諦めさせ**てくれなかった**〇〇書店編集部の〇〇さんと、…（中略）、**ありがとうございました**。（滝浦 2013:194）

（6）の「～てくれる」文が恩恵性を含意しているとすれば「諦めさせてくれない」は恩恵の否定となるため、迷惑や不満の気持ちになるはずである。しかし、文の最後は感謝表現「ありがとうございました」で終わっており、この表現から不満や非難の意とは言えない。このようなことをどのように解釈するかという問題が残っている。

また、「～てくれる」系と「～てもらう」系の互換性について研究がなされている点が挙げられる。「～てくれる」系と「～てもらう」系を比較考察した研究の中、構造の面から考察した研究は堀口（1987）がある。堀口（1987）では両表現の構造とムード的意味[5]の相違点について述べており、主格名詞句と与格名詞句を持つ構造を持つと述べている。またムード的意味における相違点について、本動詞用法としての「くれる」系と「もらう」系を比較し、置き換えが可能かどうかという問題について、「伝えているコト的意味が同じであるか、非文ではないか、文脈の中で適切であるか（ibid.:71）」の要因を手がかりとしている。

伊藤（2010）では、「～てもらう」系のほうが「～てくれる」系より丁寧であると結論付けている。その要因について、被依頼者の行動に直接触れない表現である「～てもらう」系の言い方がより丁寧さが現れるためであると述べているが、なぜ相手の行動を直接言及しないことが丁寧さにつながるかという理由については論じられていない。相手の行動が話し手にとって利益となることを最大限にアピールすることで達成できるという原理では説明できないのである。

3.3.他言語との比較・対照分析の観点から

日本語授受表現と他言語と比較・対照分析を行っている研究について、英語、中国語、韓国語を中心に見てみる。森山（2006）では、日本語を中心とし、英語、中国語、韓国語における視点の原則と授受表現の種類について整理した。

表 1 視点のルールと授受補助動詞の関係

言語 ルール	日本語	英語	中国語	韓国語
視点の主観性	主観的	客観的	客観的	客観的
ルール①	○	○	×	○
ルール②	○	○	○	○
動詞の種類	あげる、 もらう、くれる	give receive	給（gěi）	주다（juda） 받다（batta）

（森山（2006:31）を筆者が修正を加える）

上記の森山（2006）で示された「ルール①」「ルール②」をまとめたものである。

（7）　森山（2006:30-32）による授受表現の視点についてのルール

「ルール①」参与者に話し手が含まれる場合には、話し手に視点が置かれやすい。

「ルール②」被動作主より動作主のほうに視点が置かれやすい。

森山（2006）は、共通的な点として「ルール②」を言語間の共通点とし、「ルール①」を相違点であると指摘している。

英語との比較研究では、本動詞用法としての分析が主であるが、大江（1975）と奥津（1979）が代表的である。大江（1975:29-31）では「やる」は「give」に対応し、「くれる」「もらう」は「receive」に対応すると述べる。しかし、「もらう」と「receive」には完全に対応できる動詞ではない。以下の例を挙げながら説明する。

（8）？I will receive 5,000 yen from John.　ジョンに 5,000 円もらおう。

（9）？I tried to receive 5,000 yen from John.　私はジョンに 5,000 円もらおうとした。

（大江 1975:30-31）

このような例を挙げながら大江（1975）は、日本語の「もらう」は「～よう・う」の意志形の形で動作主による受け手側の意志が積極的に反映されるが、英語の「receive」では意志を表すことはできないと指摘している。一方、奥津（1979:16）では、英語の授受動詞は「give」と「receive」の 2 語で、「与え手主語」の素性で＋ならば「give」、－ならが「receive」であると述べ、日本語の授受表現での身内・よそものの区別や待遇素性は不要である点を指摘した。両者の研究において考察結果の相違が現れたことについて、本動詞としての日本語授受表現を英語の一つの表現と比較することに限界があったためであると思われる。つまり、言語形式の比較分析だけでは一般化することができないことが指摘できる。

また、中国語における比較研究の主な内容については、門和（2006）がある。日本語の授受動詞「やる・あげる・くれる」に対する中国語表現は「给（[gei3] (6)）」があり、「もらう」に対する表現は「给[gei3]・请[qing3]・让[rang4]・得到[de2dao4]」などがあると述べ、対応する形式が一致していない点が挙げられている。日本語の授受動詞は「利益・恩恵と見なして表現する文化（ibid.:63）」を持っているのに対し、中国語の表現は客観的に表現することが一般的であると説明を加えた。

佐々木（2013）では、以下のような例を挙げながら、日本語では授受表現が必要とされる状況に対して中国語ではそのような制約がないことを指摘した。

（10）　他送我一本书。[ta1song4wo3yi1ben3shu1]（佐々木 2013:62）

（lit. 彼は私に本をプレゼントした）

（11）　彼は私に本をプレゼントし**てくれた**。

（12）??私は彼に本をプレゼントし**てもらった**。

（10）の直訳のような日本語の文は不適格である。なぜかというと「彼が本をプレゼントする」行為が、話し手である「私」に向けられているためである。このような時、日本語では授受表現の使用が必要となるが、ここでは視点の制約により「～てくれる」文と「～てもらう」文が選択可能である。そして、「本をプレゼントする」という動作には、使役性が低く自発的な動作を表すことが多いため、「彼」の自らの動作であれば、「～てくれる」文が選択される。ただ、話し手である「私」が強引にプレゼントを買わせたという意味に近いという場面が加わると使用される可能性もあるが、中国語にはそのような意味は一般的に含まれていない。

日本語と韓国語の授受表現における研究について、林八龍（1980:119-120）では、日本語の「やる・くれる・もらう」と韓国語の表現との違いについて「韓国語ではあまり考慮に入れなくてもいい、『話手の立つ側』の配慮あるいは、『話手の関与』という点が大きな意味を持ち（以下、省略）」（ibid.）と述べている。奥津（1979：23）では、「朝鮮語には〔身内へ〕素性のないことが、大きなちがいである。これが日本と韓国の社会構造や社会意識の反映なのかどうか、興味ある問題である」（ibid.:23）と研究の意義について述べている。また、林八龍（1980）と奥津（1979）では、「～てもらう」文が韓国語ではないことを指摘し、韓国語のほうがより制約があると見ている。しかし、「～てもらう」文の体系がないことを指摘することに留まっており、実際の学習者がどのように習得しているかというところまでの研究はなされていない。

金昌男（1999）では、「やる・あげる・さしあげる」の「あげる文」と韓国語の「주다（juda）/드리다（deurida）[7]」について分析しており、授受表現の話し手と聞き手との人間関係で、「やる・あげる・さしあげる」が使い分けされているが、その使い分けされる人間関係という基準が日本語と韓国語の相違点がみられると述べている。この研究を通して、「やる・あげる・さしあげる」の使い分けの要因となった人間関係の基準が、「くれる・くださる」と「もらう・いただく」の表現においても通用するのかについて探る必要性が窺える。

3.4. 日本語教育の観点から

授受補助動詞における第二言語習得研究には、二宮（2002）、稲熊（2004）、尹喜貞（2006）があるが、共通的に「学習者が母語に関係なく困難さを感じる項目の一つに授受表現があり（稲熊 2004:13）」と述べられている。その要因の一つは各形式がそれぞれ表す視点の差異による格情報の示し方にあると思われる。各表現の主格と与格について文法的に理解はしていても省略された格情報の復元と省略しなければならない格情報についての理解も重要である。また、恩恵の授受のみの習得には限界がある（二宮 2002:73）という指摘のように、依頼や事象叙述といった授受補助動詞文の役割も考慮に入れるべきである。

一方、尹喜貞（2006）は、日本で外国語として日本語を学習したグループと日本以外の国で第二外国語として学習したグループに分けて、授受動詞の本動詞と補助動詞の習得について調査したが、授受補助動詞の使用において学習環境における学習達成度の差は有意

でなかったと述べている。しかし、日本語能力が低い JFL 学習者 [8] においては、「～てくれる」を「～てもらう」より多く用いていることから、母語転移が学習環境と日本語能力に複合的に影響されると述べている。しかし、日本語能力が低いグループにおいて、「～てくれる」文が「～てもらう」文より多用されていることで、語用論転移が分かるかというと、必ずしもそうとは限らない。特に「～てくれる」文と「～てもらう」文は相互交換が可能な場合もあり得るため、正用・非用・誤用についての判断において判断基準を精緻化させる問題が残されている。

4. 授受表現研究における課題

従来の授受表現研究では、主に視点の制約と恩恵性の意味、授受表現間の丁寧さの差異についての考察が論点であった。例えば、宮地（1965）、久野（1987[1978]）、奥津（1979）では授受表現の構造論的な特徴について視点の制約を中心として述べており、益岡（2001）、山田（2004）では恩恵を中心とした意味に関する記述が見られる。一方、井島（1999）、滝浦（2001）では待遇表現として聞き手中心の言語形式の発達について論じられている。このように授受表現に関する研究は、多くの研究がなされているにもかかわらず、継続して研究されている理由は、近年の研究動向として、授受表現の構造や意味のみならず、それが談話において「聴者に対して果たす対人的機能（山岡 2008:50）」という発話機能への研究が求められてきているためである。

また、授受表現の恩恵性における研究の問題点として、「利益・恩恵」の授与のみに論点が傾いている点が指摘できる。例えば、「（相手の行動を非難する口調で）よくもやってくれたね」という文は、「利益・恩恵」の意で考えられないであろう。また、調理法を説明しながら、「ケチャップをかけてあげます」や、スピーチの冒頭で、「発表させていただきます」という表現では誰が「利益・恩恵」を受けるのか明確に判断しきれない。つまり、「利益・恩恵」は授受表現の一部の意味に過ぎず、より広い範囲での働きについて考察する必要がある。

まとめると、授受表現に関する研究課題は、単文レベルから談話レベルにおける分析が必要となる点が挙げられる。授受表現を含む単文レベルでは文法上適格性を違反されないものであっても、実際の使用においては違和感があったり不自然な使い方であると感じたりする要因には、談話における機能と構文との不適格さがあるためであると考える。

（13）　（先生が持っている重そうなかばんを見て）

＊先生、かばんを持っ**てさしあげましょう**か。

（14）　（その後、友だちに会って先生に会ったことについて話しながら）

先生のかばんを持っ**てさしあげた**の。

（15）　（パーティーに来てくれた友だちに）　来**てくれて**ありがとう！

（16）　（パーティーに来てくれた友だちに）？来**てもらって**ありがとう！

（上記の例は筆者による作例である）

談話における発話機能と授受表現の関わりを探ることで、「利益・恩恵」の意味から拡大された意味・機能への解釈の問題を解決することができよう。

5. おわりに

以上、本稿でまとめた授受表現に関する研究動向をまとめ、以下の鳥瞰図に示す。

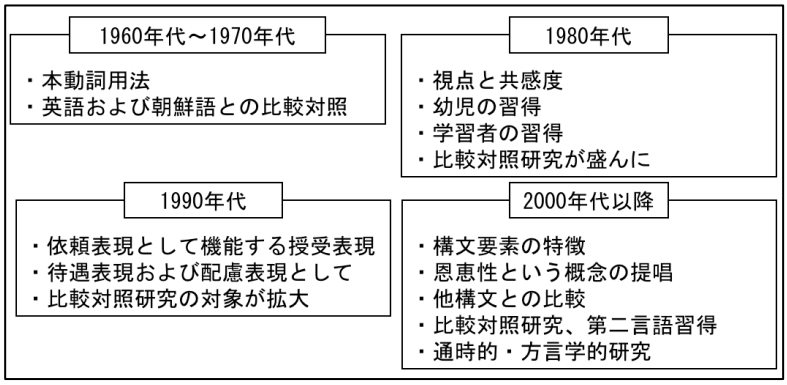

図 3 授受表現研究における鳥瞰図

授受表現に関する今後の研究課題として、授受表現の文法的な構文の特徴のみならず談話の発話機能との関係を考察する点を指摘した。これらの研究課題を追究することで授受表現のメカニズムの解明が期待できると考える。

注

(1) 久野（1987[1978]）によれば、カメラ・アングルと例えられているが、日本語では単一の文の中では単一のカメラ・アングルしか持ち得ないという制約を持つ。

(2) 辻村編（1971:363-402）にも、「～てやる」「～てあげる」「～てさしあげる」文の成立について考察しており、敬語変遷一覧表として示されている。

(3) 「～てくださる」文の成立については、辻村編（1971:363-402）を見ると、中世後期に現れていると述べている。成立初期から上位主体語、つまり動作主が話し手より目上の人である場合に使用された。

(4) 益岡（2001）は、「恩恵性」の概念について「好ましいと思われること」を意味すると述べている。

(5) ここで、ムード的意味とは、話し手が伝達しようとしている事柄と区別される概念で、話し手の主観的な心的態度を表す。例えば、授受表現「～てくれる」文を含む「ちょっとペン貸してくれる？」文は、聞き手に対する依頼を表す対人的ムードである。他の研究ではモダリティ表現と同じく扱われていることがある。

(6) 中国語の表記については、漢字の読み方（ピンイン）は、「ピンイン（pingin）変換サービス」を利用し、加えている。

(7) 韓国語の表記について、韓国国立国語院による「語文規定・ローマ字表記法規定」に従い、釜山大学と（株）ナラ・インポテクが共同開発した「ローマ字変換機」を利用した。

(8) 日本以外の国で日本語を学習しているグループのことを指す。

参考文献

井島正博（1999）「魚は 3 枚におろしてあげます:＜配慮・気配り＞を表すテヤル・テアゲル」『日本語学』18 明治書院 32-35

伊藤博美（2010）「授受構文における受益と恩恵および丁寧さ:『てくれる』文と『てもらう』文を中心として」『日本語学論集』6 東京大学大学院人文社会系研究科国語研究室 132-151
――――（2011）「させていただくの自然度と判断要因」『日本語学論集』7 東京大学人文社会系研究科国語研究室 152-139
稲熊美保（2004）「韓国人日本語学習者の授受表現の習得について:『もらう』系と『くれる』系を中心に」『国際開発研究フォーラム』26 名古屋大学 13-26
犬飼明子（2011）「敬語表現の認知的意味機能:授受動詞『～ていただく』の場合」『愛知論叢』91 愛知大学大学院院生協議会 169-200
林八龍（イム・パルリョン 1980）「日本語・韓国語の受給表現の対照研究」『日本語教育』40 日本語教育学会 113-120
大江三郎（1975）『日英語の比較研究:主観性をめぐって』南雲堂
奥津敬一郎（1979）「日本語の授受動詞構文:英語・朝鮮語と比較して」『人文学報』132 首都大学東京都市教養学部 人文・社会系（東京都立大学人文学部）1-27
――――（1984）「五 授受動詞文」鈴木一彦・林巨樹 編 『研究資料日本文法 第8巻 構文編』明治書院 237-243
――――（1986）「やりもらい動詞」『国文学解釈と鑑賞』51-1 至文堂 96-102
金久保紀子（1993）「待遇表現としての授受表現」『日本文化研究 筑波大学大学院博士課程日本文化研究学際カリキュラム紀要』4 筑波大学 15-26
金昌男（キム・チャンナム 1999）「日・韓両言語における授受動詞の対照研究:『やる/あげる/さしあげる』と『두다/드리다（～おく/～さしあげる）』について」『千葉大学ユーラシア言語文化論集』2 千葉大学 194-209
――――（2002）「現代日本語の授受表現における人称と視点について:韓国語との対照を通して」『千葉大学社会文化科学研究』6 千葉大学大学院社会文化科学研究科 226-233
教科研東京国語部会・言語教育研究サークル（1963）「第七節 やりもらい」『文法教育 その内容と方法』麥書房 109-127
久野暲（1987）『談話の文法』 第6版［第1版 1978］大修館書店
言語編集部 編（2011）『月刊言語』 30-11 大修館書店
佐々木勲人（2013）「ヴォイスと主観性」『2013年中国人民大学・北京大学・筑波大学3大学学術フォーラム 発表予稿集』中国人民大学 59-62
澤田淳（2009）「日本語の授受動詞構文をめぐって:非行為的事態との共起を中心に」『日本語学会2008年度秋季大会研究発表会発表要旨』日本語学会 123-124
砂川有里子（2006）「『～てもらっていいですか』という言い方:指示・依頼と許可求めの言語行為」上田功・野田尚史 編 『言外と言内の交流分野:小泉保博士傘寿記念論文集』大学書林 311-321
高見健一・加藤鉱三（2003abcd）「受益表現の新展開1～4」『月刊言語』32-1,2,3,4 大修館書店 140-145, 94-99, 104-109, 100-105
滝浦真人（2001）「敬語の論理と授受の論理:『聞き手中心性』と『話し手中心性』を軸として」『月刊言語』30-5 大修館書店 54-61
――――（2013）『日本語は親しさを伝えられるか』岩波書店

辻村敏樹 編（1971）『講座国語史 5 敬語史』大修館書店
二宮喜代子（2002）「日本語学習者の授受補助動詞の習得における問題点:『～てくれる』文と『～てあげる』文を中心に」『山口国文』25 山口大学 71-82
原田登美（2006）「恩恵・利益を表す〈授受表現〉と〈敬意表現〉の関わり:特に『てくれる』を中心として文法的側面と社会言語学的側面から見る」『言語と文化』10 甲南大学 203-217
――――（2007）「日本語会話における＜授受表現＞の使用実態とポライトネス・ストラテジー」『言語と文化』11 甲南大学国際言語文化センター 117-138
日高水穂（2007）『授与動詞の対照方言学的研究』ひつじ書房
堀口純子（1983）「授受表現にかかわる誤りの分析」『日本語教育』52 日本語教育学会 91-103
――――（1987）「『～テクレル』『～テモラウ』の互換性とムード的意味」『日本語学』6-4 明治書院 59-72
彭飛（ポン・フェイ 2005）「第 1 章 『配慮表現』（気配り表現）における『受益表現』の具体例をめぐって」 『日本語の「配慮表現」に関する研究』和泉書院 349-383
前田富祺（2001）「『あげる』『くれる』成立の謎:『やる』『くださる』などとの関わりで」『月刊言語』30-5 大修館書店 34-40
益岡隆志（2001）「日本語における授受動詞と恩恵性」『月刊言語』 30-5 大修館書店 26-32
宮地裕（1965）「『やる・くれる・もらう』を述語とする文の構造について」『国語学』63 日本語学会（国語学会）21-33
――――（1981）「敬語史論」『講座日本語学 9 敬語史』明治書院 1-25
門和沙日娜（ムンケ・サリナ 2006）「日中対照研究 授受表現」『昭和女子大学大学院 言語教育・コミュニケーション研究』1 昭和女子大学 53-63
森勇太（2014）「第 10 章 申し出表現の歴史的変遷:授受表現の運用史として」 金水敏・高田博行・椎名美智 編 『歴史語用論の世界 文法化・待遇表現・発話行為』 ひつじ書房 247-269
――――（2016）『発話行為から見た日本語授受表現の歴史的研究』ひつじ書房
守屋三千代（2011）「広告における受益可能表現:＜事態把握＞の観点より」『日本語日本文学』21 創価大学日本語日本文学会 19-32
森山新（2006）「視点についての認知言語学的考察」『認知言語学的観点を生かした日本語教授法・教材開発研究 1 年次報告書』平成 17～19 年度科学研究費補助金研究 28-32
山岡政紀（1990）「授受補助動詞と依頼行為」『文藝言語研究 言語篇』17 筑波大学文芸・言語学系 19-33
――――（2008）「発話機能論の歴史」『日本語日本文学』18 創価大学日本語日本文学会 49-64
山田敏弘（2004）『日本語のベネファクティブ:『てやる』『てくれる』『てもらう』の文法』明治書院
山橋幸子（1999）「『てくれる』の意味機能:『てあげる』との対比において」『日本語教育』103 日本語教育学会 21-30
――――（2003）「『(て) やる/あげる』の構造:受け手の形式をめぐって」『比較文化論叢:札幌大学文化学部紀要』11 札幌大学 A19-A35
山本裕子（2002）「『～テクレル』の機能について:対人調節的な機能に注目して」『言葉と文化』

3 名古屋大学大学院 127-144
――――（2003）「『テアゲル』の対人的な機能についての一考察」『世界の日本語教育』13 国際交流基金 143-160
尹喜貞（ユン・ヒジョン 2006）「第二言語としての日本語の授受動詞習得<研究構想>」『言語文化と日本語教育』32 お茶の水女子大学日本言語文化学研究会 62-65
横倉真弥（2011）「ポライトネス理論における社会的制限の変化と表現選択の幅の拡大」『名古屋言語研究』5 名古屋大学 53-66
米澤昌子（1996）「受給動詞の史的変遷」『同志社国文学』45 同志社大学 73-87

参照したインターネット・サイト

「韓国語/ローマ字変換機」（釜山大学情報コンピューター工学部人工知能研究室と（株）ナラ・インポテクの共同開発）
http://roman.cs.pusan.ac.kr （アクセス期間：2015 年 9 月～2016 年 9 月）
中国語ピンイン（pinyin）変換サービス
http://www.frelax.com/sc/service/pinyin/ （アクセス期間：2016 年 1 月～2016 年 9 月）

（ジュヒョンジュ、筑波大学人文社会科学研究科国際日本研究専攻博士後期課程、
murasakiju@yahoo.co.jp）